

Title	対人認知における相補性の生起過程：社会的比較感情の役割
Author	矢田, 尚也 / 池上, 知子
Citation	人文研究. 63 卷, p.9-26.
Issue Date	2012-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	中才敏郎教授：山口久和教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

対人認知における相補性の生起過程 —社会的比較感情の役割—¹⁾

矢田 尚也 池上 知子

本研究では、社会的認知の基礎次元である有能性と温かさに基づく印象形成において、相補的認知が生起する場合とハロー効果が生起する場合のメカニズムを検討した。その際、自分と他者を比較した結果として生起する社会的比較感情（尊敬、嫉妬、軽蔑、同情）が果たす役割に注目した。168名の学部学生に、対象人物と競争関係になる、協力関係になる、またはいずれの関係も持たないことを想像させ、学業面で有能な人物と有能でない人物に対する感情反応の報告と各人物に関する印象評定を求めた。その結果、どのような関係を想像するかに関わらず、有能性の高い対象人物よりも有能性の低い対象人物の方が温かいと評価され、全体として相補性がみられた。さらに、有能な人物に対しては、尊敬を感じるほど温かさを高く評価し、嫉妬を感じるほど温かさを低く評価していた。他方、有能でない人物に対しては、軽蔑を感じるほど対象人物の温かさを低く評価することが示された。つまり、尊敬と軽蔑には相補性を阻害する機能、嫉妬には相補性を促進する機能があるといえる。相補性とハロー効果の生起における感情反応の役割の限界や本研究の問題点についても議論された。

序 論

我々が他者を評価する際、どのような側面から評価しているのだろうか。他者についての印象がどのような次元に基づくかに関する研究は早くから行われている。Rosenberg, Nelson, & Vivekananthan (1968) は、我々は他者について様々な次元で評価しているが、それらは知的望ましさと対人的好ましさの2次元に大別できることを示した。近年では、他者の全体的な評価の分散の82%が、有能性と道徳性の評価によって説明されることが示されている (Wojciszke, Bazinska, & Jaworski, 1998)。これらに類する2次元は、他の多くの研究においても見出されている (e.g., Fiske, Cuddy, & Glick, 2007; Judd, James-Hawkins, Yzerbyt, & Kashima, 2005; Ybarra, Chan, Park, Burnstein, Monin, & Stanik, 2008)。各次元に対する命名は研究者間で幾分異なるものの、その本質は共通しており、一方は有能性に関連し、他方は温かさに関連しているとみなすことが可能であるとされている (Abele & Wojciszke, 2007)。本研究では、Juddら (2005) に依拠し、“有能性”と“温かさ”という名称を用いることにした。

対人認知に関する初期の研究 (Asch, 1946; Rosenberg et al., 1968) では、有能性と温かさの評価の間には正の相関関係があると考えられていた。すなわち、どちらか一方の次元においてポジティブな評価がなされた場合には、他方の次元においてもポジティブに評価され、逆に

ネガティブな評価がなされた場合には他方もネガティブに評価されるということである。これをハロー効果と呼ぶ。ところが、近年、両次元の評価は相補的關係 (i.e., 一方の次元でポジティブに評価されると、他方の次元ではネガティブに評価されるという負の相関関係) になりやすいという主張がなされるようになった (e.g., Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Judd et al., 2005)。しかし、どのような要因やメカニズムによってハロー効果と相補性の生起が規定されるのかについては、明らかになっているとは言い難い。

たとえば、Juddら (2005) は、一方の次元 (e.g., 有能性) に関して明らかに高いあるいは低いとみなされ (i.e., 操作次元)、かつ他方の次元 (e.g., 温かさ) については評価が曖昧になる (i.e., 非操作次元) ように情報が統制された集団 (または人物) を、温かさと有能性の2つの側面に基づいて評価させることで、相補性とハロー効果の生起する境界条件を実験的に検討した。その結果、操作された次元が有能性であるか温かさであるかにかかわらず、また、評価対象が個人であるか集団であるかにかかわらず、操作次元における評価が高い対象と低い対象を同時に提示した場合にのみ相補性が生起した。それに対して、単一の評価対象しか提示されない場合は、相補性は生起せず、むしろ、ハロー効果が見られやすくなる傾向が認められている。このことから、人はある次元での評価に大きな差がある2つの対象 (集団、人) を観察すると、別の次元でのそれらの評価を逆転させることにより、両者の格差を解消しようとしていと考察されている。そして、その背景には、公平で公正な世界観 (balanced view: Kay & Jost, 2003) に基づく信念 (あらゆるものには良い面と悪い面があるはずだ) が作用していると論じられている。したがって、彼らによれば、相補的認知が生起するためには、2つの対照的な評価対象を比較する過程が必要ということになる。ところが、その一方で、単一の対象のみについて評価させた場合でも、相補性が生起しうることを示した研究もある (池上, 2006)。この研究では、学部学生に、学業面で優れた、または劣った印象を与えるような架空の大学生を評価対象として提示し、有能性と温かさに関して対象人物と自分のどちらが優っているかを判断させている。すると、参加者は学業面で自分より優れていると知覚した対象より劣っていると知覚した対象のほうが、温かさにおいては自分より優れていると評価する傾向を示したのである。このように、相補性とハロー効果の生起を分岐させる要因については矛盾する知見が存在し、さらに言えば、このような要因を検討した研究自体が極めて少ない。したがって、Juddらが主張したような公平性の原理にもとづく心理機制以外のメカニズムが関与している可能性を探る必要がある。なぜなら、2つの対照的な対象の比較過程とは別に、我々は対象と自己の比較を行うことも十分考えられ、その結果が対象に対する印象評価に少なからぬ影響を与えているかもしれないからである。本研究では、Juddら (2005) の再現を試みると同時に、Smith (2000) によって提起された社会的比較感情理論の枠組みを用いて、この点を検討することにした。

何らかの次元において自分と他者とを比較した結果、さまざまな感情が生起することが考え

られる。Smith (2000) は、比較を行った次元において相手の方が優れていた場合（上方比較）と相手の方が劣っていた場合（下方比較）にそれぞれ生起する感情の性質（同化・対比）が、相手との関係性（interdependency: 競争的・協調的）によって分化すると述べている。たとえば、自分よりも有能な相手（上方比較）と競争関係にあった場合には、上方対比的感情（e.g., 嫉妬）が喚起され、協力関係にあった場合は、上方同化的感情（e.g., 尊敬）が喚起される。自分よりも有能でない相手（下方比較）と競争の関係にあった場合は、下方対比的感情（e.g., 軽蔑）が喚起され、協力的関係にあった場合には、下方同化的感情（e.g., 同情）が喚起される。

Fiskeらのステレオタイプ内容モデルに基づく一連の研究（Cuddy, Fiske, & Glick, 2007; Fiske et al., 2002）は、上述の社会的比較感情理論の主張が集団認知において妥当することを示唆している。彼女らの研究によれば、人々は自分が所属する集団より社会経済的地位が高く、かつ協力関係にある集団に対しては、有能で温かいというイメージを形成し尊敬の念を抱くが、社会経済的地位が高く競争関係にある集団に対しては、有能だが冷たいというイメージを付与し、嫉妬感情が喚起されるとされている。一方、自分の所属する集団より社会経済的地位が低く協力関係にある集団には有能でないが温かいというイメージを形成し、同情が生じやすいが、社会経済的地位が低く競争関係にある集団に対しては、有能でなく冷たいというイメージを抱き、軽蔑を感じることを示されている。ただし、Fiskeらの研究は、有能性と温かさに関する印象と感情の間の対応関係が確認されているだけで、相互の因果関係は明らかでない。けれども、そこで示されている結果から、社会経済的地位の高低に即して、有能性次元において所属集団と対象集団の比較が行われ、さらに対象集団との相互依存関係の質（協力 vs. 競争）に応じて、尊敬、嫉妬、同情、軽蔑といった感情がそれぞれ生起した結果、温かさに関する印象が決定されていると推測することは可能であろう。なぜなら、一般に感情には環境からの入力と認知的・行動的出力を接続させる機能があると考えられており、そこには一定の合理性を見出すことができるからである（Scherer, 1994）。こうした感情機能論の観点からは、対象によって喚起された感情がその対象に対する認知を方向づけることは十分予想される。

それでは、これら4種類の社会的比較感情は、対象人物の温かさの印象にどのように影響するであろうか。本研究では、各感情の性質に関するSmith (2000) の議論に基づき次のように予測した。

尊敬: 上方同化的感情 尊敬とは、優れた他者の望ましい性質や結果が、自分でも獲得可能であると感じた場合に喚起されやすい感情とされている（Smith, 2000）。したがって、尊敬が喚起されると、比較対象となる人物が役割モデル（role model）として理想化されるため、対象人物に対する全体的な評価が高まると考えられる。よって、尊敬は温かさの評価を高めると予想される。

嫉妬: 上方対比的感情 嫉妬は優れた比較対象に対する悪意（ill will）を含んでおり、その

悪意を正当化するための理由 (e.g., 対象人物の欠点) を探索するよう観察者を動機づけるとみなされている (Smith, 2000)。したがって、嫉妬は温かさの評価を低めると予想される。

同情:下方同化的感情 同情は自分よりも劣っているが好ましい対象人物に対して生じやすく、その人物に対する援助を動機づける感情であると考えられている (Smith, 2000)。このことから、同情が生起すると、一種の救済措置として、劣った対象に関する特定の重要な次元における評価が高まることが推測される。よって、同情は温かさの評価を高めると予想できる。

軽蔑:下方対比的感情 軽蔑は、比較対象が自分よりも劣っており、無価値 (worthless) であると判断された際に喚起される感情である (Smith, 2000)。Harris & Fiske (2006) はfMRIを用いた脳神経科学的研究で、軽蔑を感じる対象は非人間化 (dehumanization) されやすいことを示した。これらから、軽蔑は、重要な人格特性次元に関して対象人物の評価を低めることが考えられる。よって、軽蔑は温かさの評価を下げると予想できる。

つまり、同化的感情である尊敬と同情は対象人物に関する評価を高め、対比的感情である嫉妬と軽蔑は対象人物に関する評価を低めるといえる。したがって、これらの社会的比較感情が、自分より有能な対象人物あるいは有能でない対象人物に関する印象形成において、相補性効果とハロー効果の生起を分岐させる重要な役割を果たすと考えられる。

そこで本研究では、参加者と対象人物との関係性 (協力 vs. 競争) を実験的に操作 (教示により特定の関係を想定させるよう操作) したうえで、有能性の次元で対照的な印象を与える2人の人物 (有能な人物 vs. 有能でない人物) を提示し、その直後に参加者にそれぞれの人物と自己を比較させるという実験手続きをとることとした。これによって、条件に応じて4種類の社会的比較感情のうちのいずれかが優勢となることが予想され、そこで生起した感情が各人物の温かさの評価に及ぼす影響を調べることが可能になると考えた。また、いずれの関係も想定しない場合は、Juddら (2005) と条件が等しくなるため、有能性において対照的な2つの対象を比較した際に典型的にみられる相補性が生起するだろうと予測した (仮説2-3)。

本研究の仮説は以下に示すとおりである。

仮説

1-1 有能な対象人物の場合、競争的關係を予期した場合には嫉妬の作用により温かさの評価が低まり、協力的關係を予期した場合には尊敬の作用で温かさの評価が高まるだろう。

1-2 有能でない対象人物の場合、協力的關係を予期した場合には同情の作用により温かさの評価が高まり、競争的關係を予期した場合には軽蔑の作用で温かさの評価が低まるだろう。

2-1 競争的關係を予期した場合は、有能な対象人物に対しては相補性が認められやすくなり、有能でない人物に対してはハロー効果がみられやすくなるだろう。

2-2 協力的関係を予期した場合は、有能な対象人物に対してはハロー効果が認められやすくなり、有能でない対象人物に対しては相補性がみられやすくなるであろう。

2-3 競争的關係も協力的關係も予期しない場合は、有能な対象人物に対しても有能でない対象人物に対しても共に相補性が認められるであろう。

方 法

1. 概略

本研究では、参加者に学業面において有能な人物と有能でない人物の2人について印象を評定するよう求めた。印象評定課題に先立って、参加者には、対象人物と競争する場面、協力する場面、あるいはいずれでもない場面を想像するよう教示を与えた。その後、有能性次元において自分と相手を比べる相対評価をさせ、それに続いて、対象人物に対して抱いた感情と印象について回答を求めた。

2. 参加者と実験計画

実験参加者は大阪市立大学の学生168名（男性105名、女性62名、性別不明1名、平均19.67歳）で、関係予期の3水準（競争・協力・統制）のいずれかにランダムに割り当てられた。実験計画は3（関係予期:競争・協力・統制）×2（対象人物の有能性:高・低）で、前者が参加者間要因、後者が参加者内要因であった。回答に不備のあった7名の参加者は以降の分析から除外した。

3. 実験刺激

K. H.あるいはT. M.と名付けられた2人の人物に関する紹介文を、それぞれ6つの行動記述文から構成した。一方の人物の紹介文では、対象人物は非常に有能であることを示すように構成され（高有能文）、他方の人物の紹介文では、まったく有能でないことを示すように構成された（低有能文）。これらの紹介文に使用する行動記述文を選定するため、伊藤・池上（2006）とJuddら（2005）を参考に作成した80の行動文を用いて予備調査を行った。予備調査では、本実験には参加しない大学生46名（男性18名、女性28名）に、各行動について有能性と温かさの両次元で評価してもらった。それぞれ、-4（有能でない）～+4（有能だ）、あるいは-4（温かくない）～+4（温かい）の9件法により回答するよう求めた。行動文の順序、評定次元の順序はそれぞれ参加者間でカウンターバランスされた。分析に際しては、得点範囲が1から9となるように得点を変換し、行動文ごとに各次元の平均値を算出した。各平均値と尺度の中点（5）の差が有意か否かを検討するため、行動文ごとにそれぞれの次元について1サンプルの*t*検定を行った。温かさの印象に影響を与えることなく有能性を操作することが可能な行動文を選ぶため、有能性においては尺度の中点と有意な差があり、かつ温かさにおいては中点との差

が有意でない行動文を選定した。その結果、高有能文、低有能文、中立文 (i.e., 両次元とも中点との差が有意でない行動文) が4つずつ選ばれた。選択された高有能文と低有能文の各4項目の有能性の合算平均値を比較した結果、高有能文 ($M = 7.98$) の方が低有能文 ($M = 3.09$) よりも有意に高く評定されていた ($t(45) = 19.61, p < .001$)。それに対して各4項目の温かさの合成平均値については、高有能文 ($M = 5.14$) と低有能文 ($M = 4.89$) の間に有意な差は認められなかった ($t(45) = 1.58, p = .12$)。つまり、有能性では両者に差があるが、温かさに関しては等価であることが確認された。行動文の一覧とそれぞれの平均値を Appendix 1 に示した。高有能条件の紹介文は4つの高有能文と2つの中立文、低有能条件の紹介文は4つの低有能文と2つの中立文からそれぞれ構成された。これらの行動記述文に加えて、各紹介文の冒頭に対象人物が在籍する大学の種別に関する情報 (有名な国立大学 vs. あまり知られていない地方の私立大学) を記載した。実験に使用した紹介文は Appendix 2 に示した。

4. 手続き

実験は授業時間の一部を利用して、集団質問紙法を用いて実施した。質問紙には関係予期条件を操作するための教示文と2種類の紹介文に加えて、相対評価、感情評定、印象評定のための回答用紙を含めた。すべての参加者に、この調査は人が他者の印象をどのように形成するかを調べるための調査で、求められる作業は、短い文章を読んで2人の人物に関する質問に回答することであると説明した。表紙において性別と年齢の記入を求めた。2ページ目には、関係予期条件を操作するための教示文があり、条件間で異なる説明が記載されていた。協力条件では、同じグループに所属して友人として付き合うなど協調的関係になることを想像するよう求め、競争条件では、就職活動で同じ企業を志望するなど競争的関係になることを想像するよう求めた。統制条件では上記のような説明はなく、単に対象人物は参加者と同世代の人物であるという文章だけを記載した。参加者は上記の3つの実験条件のいずれかに無作為に割り当てられた。各実験条件の教示文は以下のとおりである。

競争条件 「今回は特に、『人は自分と競争することになるかもしれない相手についてどう感じるのか』ということについて調べることが目的です。これから2人の大学生についての紹介文を示しますが、例えば、それぞれの人物があなたと同じ就職先を希望しているなど、それぞれの人物と競争することになるということ想定して、各人物の紹介文をよく読み、以下の質問に回答してください。」

協力条件 「今回は特に、『人はこれから友人として付き合うことになるかもしれない相手についてどう感じるのか』ということについて調べることが目的です。これから2人の大学生についての紹介文を示しますが、例えば、それぞれの人物があなたと同じバイト先で働く、あるいは、あなたと同じサークルに入るなど、それぞれの人物と友人として付き合うことになるということ想定して、各人物の紹介文をよく読み、以下の質問に回答してください。」

統制条件 「今回は特に、『人は自分と同世代の相手についてどう感じるのか』ということについて調べることが目的です。これから2人の大学生についての紹介文を示しますが、それぞれの人物があなたと同世代であるということを想定して、各人物の紹介文をよく読み、以下の質問に回答してください。」

次に、有能な人物に関する行動記述文と有能でない人物に関する行動記述文がそれぞれ参加者に提示された。それらを読んだ後、まず1人目の人物に関して下記の質問項目に回答を求め、続いて2人目の人物について同じ質問項目に回答を求めた。2種類の紹介文の提示順序は参加者間でカウンターバランスされた。質問項目は以下の3部から構成された。

(1) 相対評価：それぞれの紹介文を読んだ後、最初に、それぞれの対象人物について、「以下の4つの性格特性において、あなたと対象人物のどちらがどれくらい優っていると思いますか。」という質問に回答を求めた。提示された特性項目のうち2項目（優秀さ、有能さ）は有能性に、2項目（善良さ、やさしさ）は温かさに関連していた。回答は、1（自分の方が非常に優っている）～7（相手の方が非常に優っている）の7点尺度上で求められた。これは、参加者に対象人物と自己の比較を促すとともに、有能性次元において上方比較あるいは下方比較が生起していることを確認するために行った。これらへの回答後、1人目の対象人物について、感情反応と印象評定の質問項目に回答させ、次に2人目の人物について同様に回答させた。

(2) 感情反応：16個の感情語が提示され、対象人物に対してそれぞれの感情をどれくらい感じるかについて、1（まったく感じない）～9（非常に感じる）の9件法で尋ねた。感情反応項目は4種類の社会的比較感情（尊敬、嫉妬、同情、軽蔑）に関わる感情語を4語ずつ（尊敬:尊敬する・敬意を表する・賞賛する・あこがれる 嫉妬:嫉妬・妬ましい・うらやましい・気に入らない 同情:同情する・気の毒だ・憐み・不憫だ 軽蔑:腹立たしい・軽蔑する・蔑む・情けない）含んでいた。これらの感情語はFiskeら（2002）が使用していたものを参考に独自に構成した。

(3) 印象評定：10項目の両極特性項目が提示され、それぞれの形容詞対について、対象人物に関する印象がどちらにどれくらい近いかを尋ねた。10項目のうち、5項目（知的な-知的でない・頭のいい-頭の悪い・のみこみのいい-のみこみの悪い・手際が悪い-手際のいい・分別のある-分別のない）は有能性に関する項目で、残りの5項目は温かさ（温かい-冷たい・親切的な-いじわるな・感じのいい-感じの悪い・親しみやすい-親しみにくい・思いやりのある-自分勝手な）に関する項目であった。回答は-4（非常に）～0（どちらでもない）～+4（非常に）の両極9点尺度上で求められた。これらの印象評定尺度は、Yzerbyt, Kervyn, & Judd（2008）が単極性尺度として使用していた項目に基づき、両極性尺度として再構成したものである。

これらへの回答終了後、ディブリーフィングを行い、謝辞を述べて調査を終了した。

Table 1 実験条件ごとの各従属変数の平均値と信頼性係数

対象人物		競争	協力	統制	Cronbach's α
有能性	高有能	6.77 (1.29)	7.09 (1.36)	6.91 (1.10)	.53
	低有能	3.88 (0.88)	3.75 (0.94)	4.04 (0.98)	.60
温かさ	高有能	5.00 (0.85)	4.79 (0.72)	4.80 (0.46)	.65
	低有能	5.11 (0.70)	5.23 (0.84)	5.09 (0.70)	.63
尊敬	高有能	6.35 (1.45)	6.34 (1.29)	5.75 (1.79)	.83
	低有能	2.23 (1.14)	2.27 (1.16)	2.54 (1.25)	.88
嫉妬	高有能	4.14 (1.87)	4.08 (1.73)	3.82 (1.80)	.84
	低有能	2.45 (1.21)	2.40 (1.24)	2.60 (1.19)	.76
軽蔑	高有能	2.34 (1.32)	2.25 (1.14)	2.35 (1.23)	.84
	低有能	3.55 (1.67)	3.38 (1.63)	3.61 (1.59)	.84
同情	高有能	2.61 (1.45)	2.59 (1.44)	2.61 (1.54)	.88
	低有能	3.65 (1.59)	3.47 (1.60)	3.58 (1.60)	.79

Note. 括弧内は標準偏差

結果

1. 相対評価

有能性の高い対象人物と有能性の低い対象人物のそれぞれで、有能性に関する2項目の得点の相関を求めたところ、高い相関が得られたので（高有能： $r = .84, p < .001$ 、低有能： $r = .86, p < .001$ ）、両項目の得点を平均した。これらの得点について、対象人物ごとに1サンプルのt検定を実施し、尺度の midpoint (i.e., 4) との比較を行った。また、対象人物の性別を明示していなかったため、性差についても考慮して検討した。その結果、参加者の性別によらず、高有能条件（男性： $M = 6.05; t(99) = 19.14, p < .001$ 女性： $M = 6.28; t(59) = 18.72, p < .001$ ）と低有能条件（男性： $M = 3.01; t(99) = -9.48, p < .001$ 女性： $M = 3.36; t(59) = -5.82, p < .001$ ）の両方で midpoint との差は有意であった²⁾。すなわち、参加者が、高有能条件では自分よりも相手の方が有能であると評価し、低有能条件では相手よりも自分の方が優れていると評価していたことが確認され、対象人物の有能性の操作は成功したといえる。

2. 印象評定

2人の対象人物に関する有能性と温かさの2次元に基づく印象評定を分析するため、対象人物ごとに、有能性に関する得点と温かさに関する得点を算出した。まず-4から+4で得られた評定値を1から9の範囲をとるように変換した上で、得点が高いほど有能である、あるいは温かいことを示すように各項目の得点の方向を揃え、対象人物ごとに、また印象次元ごとに、

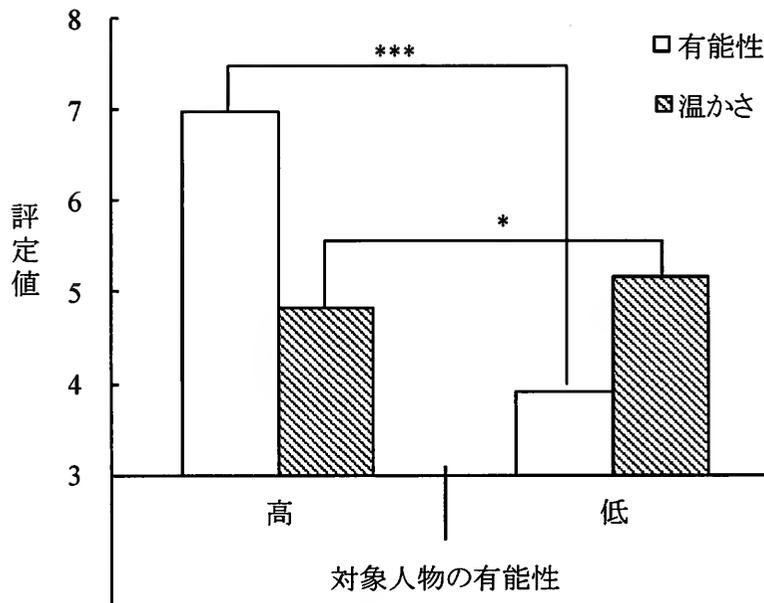


Figure 1 対象人物ごとの有能性と温かさに関する印象評定値。評定値が高いほどポジティブであることを示す。*** $p < .001$ 、* $p < .05$

それぞれ5項目の平均値を算出した。実験条件ごとの平均値と信頼性係数はTable 1の上段に記した。これらの得点について、2(性別)×3(関係予期:競争・協力・統制)×2(対象人物の有能性:高・低)×2(評価次元:有能性・温かさ)の混合4要因分散分析を実施した。前2者が参加者間要因で、後2者が参加者内要因であった。まず性別の効果であるが、性別×次元の交互作用が有意となったが($F(1, 154) = 4.61, p = .033$)、下位検定の結果、有能性次元において女性($M = 5.55$)の方が男性($M = 5.33$)よりも対象人物を高く評価する傾向にあることが示されたのみであった($F(1, 303) = 3.08, p = .080$)。その他の性別の要因を含む効果は有意とはならなかった(all $F(1, 154) s < 2.24, all ps > .10$)。対象人物の主効果($F(1, 154) = 233.65, p < .001$)と、評価次元の主効果($F(1, 154) = 56.05, p < .001$)が有意だったが、対象人物×評価次元の交互作用も有意であった($F(1, 154) = 380.05, p < .001$)。下位検定の結果、有能性については、有能性の高い対象人物($M = 6.97$)の方が有能性の低い対象人物($M = 3.92$)よりも高く評価されていたのに対し、温かさについては、有能性の低い対象人物($M = 5.16$)の方が有能性の高い対象人物($M = 4.84$)よりも高く評価されていた(有能性: $F(1, 308) = 647.51, p < .001$ 、温かさ: $F(1, 308) = 5.36, p = .021$)。さらに、対象人物ごとに温かさの評定平均値を中点(5)と比較した結果、有能な対象人物($t(160) = -2.43, p = .016$)についても有能でない対象人物($t(160) = 2.40, p = .018$)についても中点との差が有意であった。これらは相補的認知が生起していたことを示す結果であった(Figure 1)。しかし、この全体

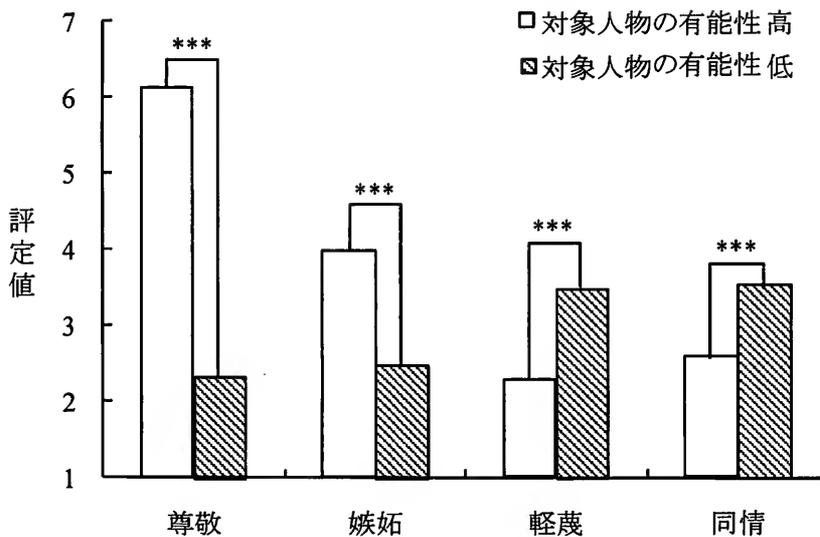


Figure 2 対象人物ごとの各感情の生起。評定値が高いほど強く喚起されていたことを示す。*** $p < .001$

的傾向は対象人物との関係性（協調関係 vs. 競争関係）によっては調整されていなかった。関係予期の要因を含む効果はいずれも有意ではなかった (all $F(2, 154) \leq 1.63$, all $ps > .20$)。

3. 感情反応

感情反応についての分析も、印象評定と同様の方法で行った。まず、対象人物ごとに、各感情について関連する4項目ずつの平均値を算出した。得点が高いほど感情が強く喚起されていたことを示すようにした。それぞれの平均値と信頼性係数はTable 1の下段に示した。これらの得点を用いて、2（性別）×3（関係性：競争・協力・統制）×2（対象人物の有能性：高・低）×4（感情：尊敬・嫉妬・軽蔑・同情）の混合4要因分散分析を実施した。前2者が参加者間要因で、後2者が参加者内要因であった。まず性別については主効果のみ有意だったが ($F(1, 154) = 4.95$, $p = .027$)、総じて男性 ($M = 3.52$)の方が女性 ($M = 3.18$)よりも感情を喚起しやすい傾向が示されたのみであった。その他の性別の要因を含む効果は有意とはならなかった (all $F(1, 154) \leq 2.24$, all $ps > .10$)。対象人物の主効果 ($F(1, 154) = 125.94$, $p < .001$)と感情の主効果 ($F(1, 154) = 84.55$, $p < .001$)が有意であったが、対象人物×感情の交互作用も有意であった ($F(1, 154) = 255.69$, $p < .001$)。下位検定を行った結果、すべての感情において対象人物の単純主効果が有意であった (Figure 2)。つまり、尊敬と嫉妬は有能性の低い対象人物 ($M_s = 2.32, 2.46$)よりも有能性の高い対象人物 ($M_s = 6.15, 3.98$)に対して感じられやすかった (尊敬: $F(1, 243) = 369.57$, $p < .001$ 、嫉妬: $F(1, 243) = 60.05$, $p < .001$)。それに対して、軽蔑と同情は有能性の高い対象人物 ($M_s = 2.28, 2.60$)よりも有能性の低い対象

人物 ($M_s = 3.47, 3.54$) に対して感じられやすかった (軽蔑: $F(1, 243) = 36.67, p < .001$ 、同情: $F(1, 243) = 23.65, p < .001$)。これらの結果は、Smith (2000) と Fiskeら (2002) の知見と一致するものであった。しかしながら、これらの全体的傾向は対象人物との関係性の違い (協調関係 vs. 競争関係) によっては調整されなかった。関係予期 × 対象人物の交互作用が有意傾向 ($F(2, 154) = 2.97, p = .054$) であったため、参考までに下位検定を行ったが、関係予期の単純主効果はいずれの対象人物の場合でも有意ではなかった。その他の関係予期の要因を含む効果は有意水準には達しなかった (all $F(2, 154) s < 1.77, all ps > .17$)。

4. 感情が印象評定に与える影響

最後に、各感情が温かさの評価に与える影響について検討するため、対象人物ごとに、4種類の感情反応を独立変数、温かさ評価を従属変数とする重回帰分析を実施した。有能性の高い対象人物については、尊敬に温かさの評価に正の影響 ($\beta = .14, t(156) = 1.67, p = .097$) を与える有意傾向が認められた一方で、嫉妬が有意な負の影響を与えていた ($\beta = -.33, t(156) = -3.26, p = .001$)。軽蔑と同情はいずれも温かさ評価に有意な影響を与えていなかった ($\beta s = .16, -.18, t(156) s = 1.29, -1.64, ps > .10$)。それに対して、有能性の低い対象人物の場合、軽蔑が温かさの評価に有意な負の影響 ($\beta = -.23, t(156) = -1.99, p = .048$) を与えていたが、それ以外の感情は有意な影響を及ぼしていなかった (尊敬: $\beta = .15, t(156) = 1.24, p = .22$ 、嫉妬: $\beta = -.05, t(156) = -0.33, p = .74$ 、同情: $\beta = .14, t(156) = 1.46, p = .15$)。つまり、有能性の高い対象人物に対しては、尊敬を感じるほど温かさを高く評価する傾向があり、嫉妬を感じるほど温かさを低く評価することが示された。また、有能性の低い対象人物に対しては、軽蔑を感じるほど対象人物の温かさを低く評価することが示された。これらの結果は、本研究が前提としていた、尊敬と同情が温かさ評価に正の影響を与え、嫉妬と軽蔑が負の影響を与えると仮定した点と概ね整合する結果であった。

考 察

本研究は、社会的判断の基礎次元である有能性と温かさに基づいて、人が他者の印象をどのように形成するのかという問題について検討した。これらの2次元間の関連に関する先行知見は一貫しておらず、背後にあるメカニズムも十分には理解されているとはいえない。いずれか一方の次元において対照的な2つの評価対象を同時に提示された場合には、有能性と温かさには負の関係がみられ、評価対象に関する印象は相補的になるが、単一の評価対象のみが提示された場合にはこのような関係は見られず、どちらかという正の関係、つまりハロー効果をもたらすという知見 (Judd et al., 2005) が存在する一方で、評価者が自分と評価対象とを比較する過程が介在すると、単一の評価対象のみが提示された場合でも、相補的認知が生起する

ことを示した研究もある(池上、2006)。そこで、本研究では、Smith (2000) の社会的比較感情理論に基づいて、相補性とハロー効果の生起を分岐させる要因として、4種類の社会的比較感情(尊敬、嫉妬、軽蔑、同情)が重要な役割を果たすと考え検討した。

本研究はJuddら(2005)の手続きに準じて、有能性が明らかに高い対象人物と低い対象人物を同時に提示して、それぞれの人物の有能性と温かさについて印象を評定させた。ただし、Juddらとは異なり、予め対象人物と協調的關係もしくは競争的關係になることを想定させる条件を設けている。また、対象人物の行動文を提示した直後に自分との比較を行わせた。その結果、Juddら(2005)と同様に、対象人物の温かさに関する情報は一切与えなかったにも関わらず、有能性の高い人物より有能性の低い人物の方が温かさにおいて高く評価されるという相補性が生じた。しかし、本研究の予測に反して、この全体的傾向は対象人物との関係性によって影響されることはなかった。つまり、対象人物とどのような関係を予期するかに関わらず相補性が生じた。

さらに、感情反応に関する結果は、尊敬と嫉妬は有能性の高い対象人物に対してより喚起されやすく、軽蔑と同情は有能性の低い対象人物に対してより喚起されやすいことを示していた。これは集団を評価対象としたFiskeら(2002)の結果と類似しており、Smith(2000)の社会的比較感情理論における議論と一貫する結果であった。しかしながら、印象評定についての結果と同様に、感情反応も対象人物との関係性の違いには影響されなかった。

関係性の操作は、感情反応に対して予測したような影響を与えなかったが、重回帰分析の結果から、社会的比較感情が温かさに関する評価にそれぞれ固有の影響を及ぼす可能性が示された。この結果は部分的にはあるが仮説を支持した。具体的には、有能性の高い対象人物の場合、尊敬は温かさの評価に正の影響を与えるのに対して、嫉妬は温かさの評価に負の影響を与えた(ただし、尊敬の影響は有意傾向にとどまったためさらに検討する必要がある)。他方、有能性の低い対象人物の場合、軽蔑が対象人物の温かさに関する評価に負の影響を与えた。つまり、尊敬と軽蔑はハロー効果をもたらすか、少なくとも相補性の生起を阻害し、嫉妬は相補性の生起を促進することが示唆される。これらの結果は、それぞれの社会的比較感情が印象評定に及ぼす影響に関する議論を支持し、Fiskeら(2002)のステレオタイプ内容モデルにおける有能性と温かさに関するステレオタイプと感情反応の間にみられる相関パターンと一貫している。

以上、印象評定においても、感情反応においても、どのような関係性を予期するかによって反応が異なることは示されなかったが、社会的比較感情のうち、少なくとも尊敬、嫉妬、軽蔑の3種類の感情が他者の温かさに関する評価に特異的に影響を与えることを確認することはできた。したがって、有能な対象と有能でない対象を見たときに別の側面である温かさの評価によってバランスをとるという心的過程(Judd et al., 2005)だけでなく、自分と評価対象とを比較した際に喚起される感情によっても相補性とハロー効果の生起が規定されることが示唆さ

れる。言い換えると、相補的認知は公平的世界観に基づく認知的なバイアスによってのみ生起しているのではなく、自他の比較によって生起する感情に媒介されて生起する動機づけられた認知としての側面も持つことが本研究によって示されたといえる。

しかしながら、本研究にはいくつかの未解決の課題が残されている。1つ目は、評価者と対象人物との関係性の操作が機能しなかったことである。そのため、自他の関係性が感情反応の生起や対象人物の温かさの評価に与える影響は明らかにならなかった。関係性の操作が有効に機能しなかった原因として、場面想定法を用いたことが考えられる。本研究では、対象人物に関する紹介文を読む前に、質問紙に書かれた教示文によって、対象人物と競争（または、協力）することになる状況を想像するように指示した。しかし、このような方法では、参加者にとって現実感があまりなく、結果、関係性の操作が不十分となったと考えられる。また、対象人物との関係性をリアルに想像できたか否かについて確認する手続きを含まなかった点も問題であろう。したがって、今後の研究では、実際に相手と競争する、あるいは協力するような状況を設定し、かつ、その操作が十分に機能しているか否かに関して確認した上で、その相手に対する感情と印象を測定する必要があるだろう。

2点目として、刺激人物の有能性を操作するための刺激文に関する問題が挙げられる。有能な対象人物に関しては知能や学力の高さを示す文章によってまばら構成されていたのに対し、有能でない対象人物に関しては、知能や学力だけでなく社会的、対人的な能力の欠如を示す文章も含まれていた。つまり、実験条件によって、操作された有能性の次元が異なっていたといえる。ただし、有能性の認知にはさまざまな領域における能力の有無が反映されると考えられ、本研究においても、感情や印象への影響はある程度確認されているため、実験操作の有効性を損なうものではないだろう。しかし、今後は、操作する有能性の情報の等質性をより厳密に統一した上で検討を加える必要があると考えられる。

第3に、本研究の結果からは、感情と印象（温かさの評価）の因果関係が必ずしも明らかではない点があげられる。重回帰分析の結果は、各感情が温かさの評価に影響していることを示唆するものであったが、反対方向の影響過程を否定することはできない。つまり、有能性の評価が直ちに温かさの評価を規定し、その結果として感情が生起したという解釈も可能である。感情反応と印象評定の因果関係については、さらに検討する必要があるだろう。

4点目は、本研究の手続きがJuddら（2005）の手続きに準じ、有能な人物と有能でない人物を同時に提示している点である。本研究では、自他の比較を促し、その結果生起する感情が印象評定に与える影響をとらえることを試みた。その結果、尊敬と軽蔑が生起すると相補的認知を阻害することが見出された。しかし、それにもかかわらず、全体としてかなり明確な相補性が認められている。したがって、本研究の結果は、2人の対照的な人物を比較することで、すべての人物は長所と短所を併せ持つとする公平的世界観が活性化し、相補性ヒューリスティクスへの依存が動機づけられたために生じた可能性が大きい。今後の研究では、評価対象を単

一にした上で、社会的比較感情が対象人物の評価にどのように影響するかを検討することが求められる。

最後に、本研究では、対象人物の有能性の程度が、温かさに関する評価に与える影響しか検討していない点があげられる。Juddら（2005）で明らかにされたように、相補性は、温かさの評価の高低により有能性の評価が逆転するという形でも現れる。しかし、温かさ→有能性で生起する相補性は、有能性→温かさで生起する相補性よりも弱く、そのためにほとんど検討がなされてこなかった。特に、単一の対象を評価させる条件下で温かさ次元の情報を操作した場合に有能性の評価において相補性とハロー効果のどちらが生起するかについて検討した研究はまだ報告されていないが、この場合の生起プロセスが社会的比較感情理論の枠組みによって説明可能であるかは不明である。たとえば、ある人物と競争関係に置かれたとき、その人物が冷たい人物（自分と比べ温かさに欠ける人物）であると知った場合、軽蔑を感じて相手の能力を低く評価するようになるだろうか。Fiskeら（2007）は、温かさの評価は、相手が自分にどのような意図（友好的vs.敵対的）をもっているかの判断に対応し、有能性の評価は、その意図を実行する能力の有無の判断に対応すると述べている。したがって、競争相手が冷たい人物であるという情報は、自分に対して強い敵対心を持つことを予見させるため、警戒心から相手の能力を高く見積もり相手からの攻撃に備えるということもあるかもしれない。そして、相手が温かい人物であると知れば、油断をして相手の能力を低く見積もることもあるであろう。今後は相補性の生起を説明する枠組みとして社会的比較感情理論以外の枠組みについて検討する必要があるかもしれない。

【付記】

1 本研究は、第2著者の指導のもとに第1著者が平成21年度に大阪市立大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部を、新たな考察を加えまとめ直したものである。本研究の一部は日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会で発表された。

2 有能な対象人物との比較において4以下と評定し、有能でない対象人物に対して4以上と評定した参加者（ $N = 49$ ）を除外した112名で同様の分析を行った結果は、本論文で示されている結果とほぼ同様であった。そのため、除外される参加者の数が多いことや、実験的な操作が成功しなかった参加者も含めた結果のほうがより頑健な結果であると考えられることから、本論文では上記の参加者から得られたデータも含めた分析の結果を示すこととした。

【引用文献】

- Abele, A. E., & Wojciszke, B. 2007. Agency and communion from the perspective of self versus others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, 751-763.
- Asch, S. E. 1946. Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. 2007. The BIAS map: Behaviors from intergroup affect and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 631-648.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., & Glick, P. 2007. Universal dimensions of social cognition: Warmth and

- competence. *Trends in Cognitive Sciences*, 11, 77-83.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. 2002. Model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- Harris, L. T., & Fiske, S. T. 2006. Dehumanizing the lowest of the low: Neuroimaging responses to extreme out-groups. *Psychological Science*, 17, 847-853.
- 池上知子 2006. 「対人認知の相補性は何を意味するのか: System justification との関連」『日本社会心理学会第47回大会発表論文集』78-79.
- 伊藤公一郎・池上知子 2006. 「動機と行動の関連性についての素朴理論」『心理学研究』77, 415-423.
- Judd, C. M., James-Hawkins, L., Yzerbyt, V., & Kashima, Y. 2005. Fundamental dimensions of social judgment: Understanding the relations between judgments of competence and warmth. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 899-913.
- Kay, A. C., & Jost, J. T. 2003. Complementary justice: "Poor but happy" and "poor but honest" stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 823-837.
- Rosenberg, S., Nelson, C., & Vivekananthan, P. S. 1968. A multidimensional approach to the structure of personality impressions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 283-294.
- Scherer, K. R. 1994. Emotion serves to decouple stimulus and response. In P. Ekman & R. J. Davidson (Eds.), *The nature of emotion: Fundamental questions* (pp. 127-130). New York: Oxford University Press.
- Smith, R. H. 2000. Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparisons. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research* (pp. 173-200). New York: Plenum.
- Wojciszke, B., Bazinska, R., & Jaworski, M. 1998. On the dominance of moral categories in impression formation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 1251-1263.
- Ybarra, O., Chan, E., Park, H., Burnstein, E., Monin, B., & Stanik, C. 2008. Life's recurring challenges and the fundamental dimensions: An integration and its implications for cultural differences and similarities. *European Journal of Social Psychology*, 38, 1083-1092.
- Yzerbyt, V. Y., Kervyn, N., & Judd, C. M. 2008. Compensation versus halo: The unique relations between the fundamental dimensions of social judgment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 1110-1123.

【2011年8月25日受付, 10月26日受理】

Appendix 1 実験刺激として用いられた行動記述文

行動記述文	有能性		温かさ	
	M	SD	M	SD
High-Competence				
Xはある企業と共同で優秀なコンピュータプログラムを開発した。	8.28	0.96	5.17	0.85
Xは学部学生でありながら、論文を有名な学会誌に載せた。	8.07	1.50	5.13	0.58
Xの成績は、1つだけ“B”で、あとはすべて“A”だった。	7.87	1.13	5.13	0.69
Xは大学卒業後、外国の大学院に進学することが決まっている。	7.72	1.46	5.11	0.48
Low-Competence				
Xは電気料金をよく払い忘れて電気を止められる。	2.41	1.13	4.67	1.35
Xは勉強すべき範囲を間違えたために試験に失敗した。	3.09	1.28	5.20	0.81
Xは授業中、机につっぷして寝てばかりいる。	3.37	1.68	4.76	1.45
Xは授業で質問されたとき、まともに返答できなかった。	3.50	1.59	4.93	0.90
Neutral				
Xは電車に乗っている間、よく携帯のメールをチェックしている。	5.00	0.82	4.91	1.21
Xはよく食堂に行ってカレーを食べる。	4.96	0.89	5.24	1.23
Xはサークルの試合でときどき講義を欠席する。	4.89	1.21	5.24	1.23
Xはだいたい毎日テレビを見る。	4.76	0.87	5.17	0.97

Note. 得点は高いほどポジティブであることを示す。中点は5

Appendix 2 実験刺激として用いた行動記述文

有能性の高い対象人物

K・Hはある有名な国立大学に通っている大学生である。K・Hは実家から通っており、電車に乗っている間、いつも携帯のメールをチェックしている。大学の食堂ではよくカレーを食べる。K・Hは学部学生でありながら、論文を有名な学術雑誌に載せたことがあり、またある企業と共同で優秀なコンピュータプログラムを開発したことがある。K・Hの大学でのこれまでの成績は、1つだけ“B”で、あとはすべて“A”だった。K・Hは大学卒業後、外国の大学院に進学することが決まっている。

有能性の低い対象人物

T・Mはあまり名の知られていない地方の私立大学に通っている。T・Mは大学の近くに下宿しており、家ではだいたいテレビを見ている。T・Mはときどきサークルの試合で講義を欠席することもある。T・Mはよく電気料金を払い忘れて電気を止められることがある。T・Mは授業中、机につっぷして寝てばかりいて、この間の授業で先生に質問されたとき、まともに返答することができなかった。さらに、T・Mは出題範囲を間違えたために試験に失敗したこともあった。

Note. 対象人物の名称、提示順序は参加者間でカウンターバランスされた

An Investigation on Compensation Effects in Person Perception: Role of Social Comparison-Based Emotions

YADA Naoya & IKEGAMI Tomoko

Abstract

This study investigates the mechanisms that influence the likelihood of compensation or halo effects in person perception, with a focus on the role of social comparison-based emotions: admiration, envy, pity, and contempt. A total of 168 undergraduates answered about their feelings and impressions toward two target persons, one depicted as academically competent and the other incompetent, under one of three experimental conditions in which they imagined themselves to compete, cooperate, or not interact with the targets. We found a typical compensation effect where the low-competence target was judged as warmer than the high-competence target, regardless of the status of the self-target relationship. Moreover, we obtained evidence for the role of social comparison-based emotions: for the high-competence target, a stronger arousal of admiration was associated with a higher rating of the target's warmth, while stronger envy was linked to the derogation of the target on the warmth dimension. For the low-competence target, the stronger arousal of contempt was associated with a lower rating of the target's warmth. In other words, admiration and contempt attenuated the compensation effect but envy facilitated it. In addition to the limitations of the role of emotions in the compensation effect, several unresolved questions are also discussed.